

# 3.11ソレカラ

～被災事業所の現在地～

# くじらのしっぽ

あの日、牡鹿半島の高台にある「清優館」は、多くの被災者を受け入れる避難所となり、障害福祉サービス事業所「くじらのしっぽ」の利用者と職員もそこで避難生活を送りました。当初は障害者への偏見から誤解を受けることもありましたが、共にトイレ掃除や救援物資の運搬を行うことで互いを知り、地域の人々と力を合わせる関係を築いていきました。

あれから15年。被災地は復興住宅が建ち並び、景色は変わりました。「くじらのしっぽ」と利用者さんたちは今、どのような日々を送っているのでしょうか。

## 1. 振り返る暇もないほど忙しい日々



左から須田施設長、  
小川絢子さん（利用者）

「変わったことですか？ うーん、それを感じる暇もないくらい毎日忙しく過ごしています。」

そう笑顔で話すのは、震災当時29歳だった小川絢子さんです。現在は事業所から車で5分ほどの復興住宅団地で一人暮らしを続けています。団地には約20世帯が暮らしており、かつてのような「顔なじみ」ばかりではありません。ですが、地域の区長さんが以前グループホームの世話人をしていた方ということもあって、安心して地域生活を送っています。

現在の小川さんの仕事は多岐にわたります。人気の「金華塩」や「バジル塩」の製造、ハーフティーの箱詰め作業などに従事しており、まさに「目が回るほどの忙しさ」が、彼女の充実した日々を物語っています。

## 3. 教訓を胸に、次の災害へ備える



震災から15年が経過しても、あの日の教訓は色褪せていません。

施設では、送迎車両のガソリンを常に満タンにしておくことをルール化し、送迎ルートも沿岸部を避けて内陸部を通るように変更しました。また、定期的な避難訓練に加え、食料や水の備蓄、BCP（事業継続計画）の策定など、万全の対策をとっています。

須田施設長は「避難の際、車は渋滞で動けなくなる可能性があります。いざという時は『車を捨てる勇気』を持つこと、その決断を平時からイメージしておくことが大切です」と語ります。

高齢化という課題や、利用定員に空きが出た際の募集の難しさはありますが、「くじらのしっぽ」は地域と共に歩み、備え、そして働き続けています。

あの日、避難所で生まれた「互いを知ることによって力を合わせる」という絆。それは15年経った今も、形を変えながらこの牡鹿半島の地でしっかりと育まれています。

## 2. 地域の担い手として支える水産業



「くじらのしっぽ」の活動は、地域の基幹産業である水産業とも深く結びついています。

看板商品である「金華塩」は、ネット通販や地元のお店で販売され、需要に供給が追いつかないほどの人気です。今年度は塩炊き釜の故障というトラブルもありましたが、地元のクラフトビール醸造所の「ホップソルト」や、オリーブの葉を使った「オリーブ塩」などの加工用素材としての新たな需要にも応えています。

また、2月から4月にかけては、ワカメの「めかぶそぎ」作業に精を出します。6～7名の利用者が現場へ赴き、1日5時間ほど作業を行います。その手つきは職員にも作業のコツを教えられるほどに熟練しています。水産業の人手不足が深刻化する中、利用者さんたちの働きは地域の産業を支える貴重な戦力となっているのです。かつて避難所で「助けられる側」から「役割を担う側」へと立場が変化したように、今も彼らは地域社会の不可欠な一員として貢献しています。